



ふたはの桂

2013.10

京都府大広報 No.172



CONTENTS

特集1 京都府立大学におけるキャリア教育 ②
～キャリア育成プログラムを中心に～

特集2 キャンパス整備の状況 ⑤

トピックス

地域連携／国際交流 ⑥ 公開講座・生涯学習 ⑧ 受賞情報 ⑨

各学部・研究科の取り組み

文学部 ⑩ 公共政策学部 ⑩ 生命環境科学研究科 ⑪

ニューフェース ⑫ / イベント情報 ⑫

特集1

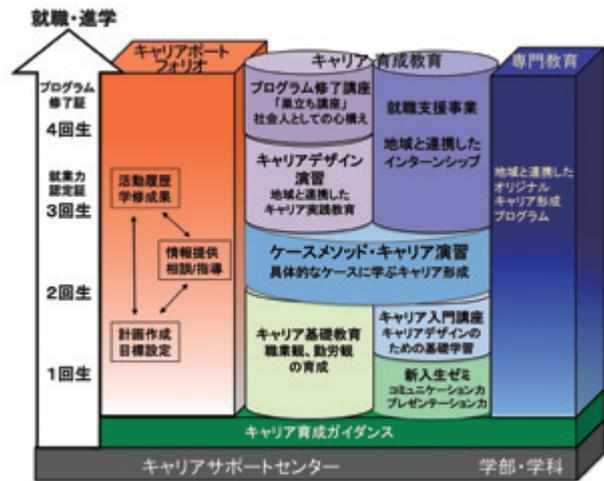
■ 京都府立大学におけるキャリア教育 ■
～キャリア育成プログラムを中心に～

キャリアサポートセンター 特任准教授 小山 裕子

【京都府立大学キャリア育成プログラムについて】

京都府立大学のキャリア教育は、本学の理念と行動憲章に則って、地域社会と国際社会の持続可能な発展に貢献できる、倫理的判断力を持ち調和のとれた働き方・生き方を創造していく人間を育成するための教育と支援を基本方針としています。この基本方針を具現化するものとして、初年次からキャリアについての意識を持たせ、地域・産業界などと協力してキャリア教育・支援を展開する「キャリア育成プログラム」を平成23年度から実施しており、今年で3年目を迎えます。

キャリア育成プログラムは右図に示すように、4年間を通じたキャリア育成教育、地域と連携した各学部専門教育、キャリアポートフォリオの活用から構成されています。ここでは1回生後期の必修科目「キャリア入門講座」と2回生前期の必修科目「ケースメソッド・キャリア演習」、そして今年度新たに選択科目として開講した「キャリアデザイン演習」についてご紹介したいと思います。



※キャリアポートフォリオとは、学生と教職員を結び、学生自身によるキャリアデザインや大学による就職情報の提供と指導を通じて将来の進路に結びつけていくためのサポートシステムです。

【キャリア入門講座】

「キャリア入門講座」は1回生の段階で「大学での学びと社会との接点」に気づき、「自ら考え、行動するキャリア自律」を目的として開講しています。具体的には、自分理解と社会的・職業的自立への意識の醸成を目標としています。授業は、特任教員によるキャリア形成の基礎講義と6回のリレー講座で構成されています。リレー講座は地域や国際社会、企業、NPO等のさまざまな分野で働く方々をゲストスピーカーとしてお招きしています。

6人のゲストスピーカーが各回に講演することで、各分野や業界の仕事の内容を知り、働くことの意義ややりがいを感じ取り、適切な職業観の醸成をはかります。併せて社会で求められているスキルや能力、姿勢について理解し、

学生生活の間に伸ばしていくことを意識させる機会としています。授業後に、ポートフォリオのレポート機能を利用し、講義や講演での気づきや発見、振り返り、行動の記録を言語化し、蓄積していくことで、学生個人の成長の記録になるので、キャリア形成のツールとしています。ポートフォリオを教員が読み、学生の理解度や状況を把握する一方で、教員からのコメントもポートフォリオシステムのコメント機能を使って伝えていきます。またポートフォリオの別のメニューを利用して、社会人基礎力をベースとした評価項目に対して、学生が毎学期の終了時に測定し、記録を続けることで、自分自身の成長を可視化できるようになっています。

※これまでのリレー講座より

佐々木酒造株式会社 代表取締役 佐々木晃氏
(平成23、24年)

伝統産業の分野から、洛中でただ一つの蔵元である佐々木酒造株式会社 代表取締役の佐々木晃氏をゲストスピーカーとしてお招きしました。京都府立大学と協働で開発されたバイオ技術のノンアルコール飲料「白い銀明水」の完成に至るまでの様子を、スライドを交えてわかりやすくお話いただきました。伝統産業にバイオ技術が駆使されていることに驚く学

生達に、佐々木氏が「伝統産業はその時の最先端」とおっしゃった言葉は多くの学生達の心に響いたようです。佐々木氏の静かな語り口と人柄から、「仕事のもつ厳しさ」と楽しさ、仕事に対する誇りを感じ取った」「失敗を重ねながらも困難に立ちむかっていく姿勢を学んだ」等の気づきがポートフォリオの授業用記録シートに記載されていました。講演後に、パネリストとのディスカッションやフロアからの活発な質疑がありました。



なお、平成24年のリレー講座の様子は、本学ホームページからも動画を配信しておりますので、ご関心がありましたら、本学ホームページのキャリア教育→「キャリア入門講座—学びと経験—」ゲストスピーカーによるリレー講演から、または、右記のURLに直接アクセスしてご覧ください。http://kpu-careerseminar.jp/

キャリア育成プログラム委員会 築山委員長（副学長）からのメッセージ

働き方・生き方の創造に向けた学びを！

本学のキャリア教育が目指す「働き方・生き方を創造していく人間の育成」という目標は、社会の変化に対応してだけでなく、新たな社会を構築していく主体の形成を目指すものと言える。それは、「学習活動はあらゆる教育活動の中心に位置づけられ、人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていくものである」というユネスコの「学習権宣言」の理念にも通ずる。

創造性・主体性を、現実の社会とのかかわりの中で自分自身の生き方として実現していくには、多くの困難・挑戦を必要とする。そのためには、社会における様々な

現実を、人間の在り方とかかわらせてリアルにとらえる学びが不可欠である。本学のキャリア育成プログラムに位置付けられているケーススタディやインターンシップなどを通じて、働くことの実際や多様な社会問題に触れることは、学びの中味としてキャリア教育の重要な要素である。

一方で、キャリア教育という言葉から大学生であればだれもがイメージしやすい様々な業界や各種資格に関わる情報、エントリーシートの書き方や面接の技法といった具体的ノウハウなどがある。これらは、働くことの実際に触れることとならんで、確かに必要な情報なのであるが、それ以上に大事なのが、現実の社会と切り結ぶ学びであることを、学生諸君には銘記してほしい。

【ケースメソッド・キャリア演習】

キャリア入門講座を履修した2回生を対象に、地域に根差した生き方ができる人間を育てることを目的として、前期に学科ごとに開講しました。1クラス30名余～55名で、やや人数が多めのグループ演習形式ですが、就業や地域・企業に関わる実用的・具体的問題事例（ケース）を用いて、グループワークによる一連の活動を通じて、課題設定力、課題解決力、コミュニケーション力、倫理的判断力、チームで働く力、企画力を養い、社会性を育てることを目標としました。

この授業では3つの問題事例（ケース）を用意し、グループワークによるケースの課題抽出、課題解決のための討論、対応策案の作成とプレゼンテーションを行います。ケースの内容は、進路に関わる課題を扱うイントロダクション・ケース、企業や地域が直面している課題に取り組むアドバンスド・ケース、キャリア講演会の企画を作成するケースの3つです。

今年度は、アドバンスド・ケースの「企業や地域に関わる具体的問題事例（ケース）」で、京都経済同友会のご協力を得て、地域の各企業や財団が直面する具体的問題事例（ケース）を提供いただき、学生が積極的に参加できるPBL（プ

ロジェクト・ベースド・ラーニング）型授業を展開しました。今年度のケースメソッド・キャリア演習に新しくPBL型形式を取り入れた背景として、以下の2つのことが挙げられます。

- 1 ケースメソッド・キャリア演習において、課題発見力や課題解決力のみならず、社会で働く人の仕事に対する取り組み方や姿勢を体感することで、社会認知を深め、仕事理解につなげる。
- 2 本学のキャリア育成プログラムが「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に選定されたことをきっかけに、京都経済同友会を中心に産業界とのより密接な連携で、本プログラムを進めていくことが可能となった。

PBL型授業について概略を説明しますと、企業や団体から担当者の方を招き、業界や仕事の内容についての説明のあと、直面している具体的問題事例を提示いただき、学生が課題を抽出しながら中間発表を行い、対応策をグループワークで形にして、最終発表のプレゼンテーションを行うという授業で、お招きした企業や団体の担当者の方には大きな協力をいただいています。



※企業・団体から、アドバンスド・ケースにおけるケースの提供を受けて、連携により行った授業

学部・学科×企業・団体	ケース
文学部・日本中国文学科×公益財団法人小倉百人一首文化財団	時雨殿の広報戦略と利用者の増加をはかる企画案
文学部・欧米言語文化学科×土山印刷株式会社	印刷技術を使った新規事業の提案
文学部・歴史学科 / 公共政策学部・公共政策学科×ケイミュー株式会社	ケイミュー(株)の大学生向け広報戦略の見直し案
公共政策学部・福祉社会学科×株式会社ウエダ本社（事務機器商社）	人にやさしいオフィスの提案
生命環境学部・生命分子化学科 / 食保健学科×京都府健康福祉部福祉・援護課	就活うつを予防する方策
生命環境学部・農学生命科学科 / 環境デザイン学科×株式会社ナベル（卵包装器製造業）	発明提案制度の改善案
生命環境学部・環境・情報科学科 / 森林科学科×株式会社ケービデオ（防犯カメラシステム製造業）	防犯カメラシステムを防犯以外の目的で使用した事業の提案

○ケースメソッド・キャリア演習 学生の感想

(振り返りシート、キャリアポートフォリオの記述から一部抜粋)

- 社会に必要なことは、正解を探すのではなく、最善と思える策を考えることなのだと思いました。また、いろいろな人の意見の中に、学ぶべき部分を見つけ、自分の視野を広げながら、柔軟に考えていくことが大切なのだと感じました。今後はいろんなことに興味関心を持ちつつ生活したいと思いました。
- 実在する企業が抱える課題や現状に触れることで、社会を実感することが出来ました。私は社会人になること、仕事に対してすごく不安に思っていたのですが、学生でも企業の改善に貢献できるんだと思うと、少し不安は解消されました。
- 企業が実際に抱えている問題について、グループ内で解決策を話し合い、スライドを使って発表するという作業が、とても新鮮でこんな課題があるのかという発見がありました。
- 大学に入学してから、長時間にわたってグループワークをする機会はなかったので、明確な課題を与えられて7時間で成果を出すというのはとてもやりがいがあった。結果的に自分のチームが皆からよい評価をいただくことができ、努力が報われた気がして、素直にうれしかった。
- 今まで漠然としか、「もっとこんなことしないといけないんだろうなあ」とか、「将来がなんとなく不安だなあ」と思っていなかったけれど、今回の授業で社会から何が求められていて、何が自分に足りないのかに現実的に向き合うことができた。この気づきを無駄にしないために普通の授業や課題を今まで以上に大切に、卒業後の具体的なビジョンを見据えながら、自分なりの学び方を作って行きたい。
- 今回の授業を通して、商品開発に関しても社会の現状をしっかり把握することが大切だと感じた。今後はメディアを用いて世

間の動きを見極められる努力をしていきたい。一般的な知識を新聞で身につけると共に、私は林政に将来携わりたいので専門的な雑誌からも吸収しようと思う。また、今回のグループワークを通して普段あまり話さない友人とも、将来自分達が今学んでいる専門知識をどのように活かしたいと考えているかを話しあえ、新しい発見があった。今後は森林科学を専攻する同士、積極的に情報交換し、互いに刺激を受け合っていきたい。

○協力企業からの感想

- 当社は、CSR活動の一環といたしまして、学生の方に企業の「ものの見方」「考え方」に触れていただければとのことで、今回の課題を提供させていただきました。中間報告では混沌とした状況でしたが、最終発表では各チーム充実した取り組みであったと感じ取れる発表内容でした。
- 初回の演習時は、弊社の事をほとんど知らなかった学生さん達も、演習が進むにつれ深く研究し、最終発表会の時には、弊社社員にも劣らないほどに会社の事をよく考えて、我々が普段気づいていない課題を数多く提案してくれました。演習参加の我々の目標達成より、京都府立大学の学生さん達の能力の可能性にとっても期待と感心できた機会となりました。自分で問題意識を持ち、自分で問題を解決出来る人材を社会は求めています。今後もぜひ自律自走の教育を探求して行って下さい。
- ほとんどのグループのアイデアの中に社会の課題(二酸化炭素排出量・森林の荒廃)を解決したいという思いが込められていた。提供したテーマについて深く考えた提案ばかりであった。
- 提案の中には実際に採用したいものがあった。来年度は工場や使用現場の見学の機会を提供するなど、さらに、授業に協力したい。

【キャリアデザイン演習】

今年度から3回生に対して、選択科目としてキャリアデザイン演習を開講しました。この授業では、学生が自らキャリア講演会シリーズを企画し、受講生一人一人が6回シリーズのうちの一つのセミナーの担当者となります。今年度のシリーズ名はキャリア講演会を学生が初めて企画するというので、「府大生の、府大生による、府大生のためのキャリア講演会」となりました。

各講演会のタイトルや目的は担当する学生が中心になって全員で話し合いを行った後、決定し、準備・実施段階で他の受講生の協力を得ながら、企画を実行に移すという演習です。当日の進行は言うに及ばず、企画書づくり、講演会のスタイル、ゲストスピーカーとの日程および企画の主旨等を含めた打ち合わせ、ポスターやピラの制作および配布、ホームページ等の原稿制作、当日の時間配分、講演会の形式の設定、アンケート作成・実施・集計、ゲストスピーカーへのお礼、アンケートの結果報告、フィードバック等までを短期間で、ほぼ一人

ないし二人で行うものです。この授業で最も養われるのは、自主・自律で物事を進める姿勢です。本学の学生の多くが苦手とする実行力や行動力が試される授業でもあり、準備は大変だったようです。



「金融への道」(学生企画)
本学OG及び採用担当者との座談会

○キャリアデザイン演習 学生の感想

(キャリアポートフォリオの記述から一部抜粋)

- 初めて講演会の企画、運営を経験した。今までキャリアメソッドなどでグループワークを行うことはたくさんあったが、今回ほどグループ内で自分の責任の重さを実感したことはなかった。多くの人が動く企画の中心に自分がいるということで、これほどの緊張感、責任感を抱くということ、また、自分の役割を全うすることの大切さを、今回の運営で実感できた。1、2回生の頃は特に何も考えずに講演会に参加していたけれど、参加者が何も考えずに講演会の内容に集中できる状態にたどり着くまで、企画案を練る、役割を分担しそれぞれが動く、アポイントを取ってこちらの要望をお伝えする、相手の方の要望をお聞きし、何回もミーティングを繰り返す…等、緻密でエネルギーを要する作業がたくさんあることを、自分達がその下準備をすることで実感できた。見える部分は「講演会」というほんの一部であり、その一部が駄目であると、今までの準備もすべて無駄になってしまうという緊張感は大きかったが、その分講演会が成功したときの達成感、充実感はこの上ないものだった。
- 講演会を開くにあたって、「企画」「折衝」「広報」「司会・進行」と様々な仕事をさせていただきました。これらすべては、実際に社会に出て、仕事をする際に必要なスキルだと思うので、今回失敗したと思うところはきちんと直して、ここはよかったと思うところを伸ばしていきたいと思っています。

特集2

■ キャンパス整備の状況 ■

施設整備委員会委員長（副学長） 東 あかね

あらし

下鴨農場の跡地に高いクレーン車が屹立し、三大学教養教育共同化施設の建設が進んでいます。また、新総合資料館、本学附属図書館と文学部の合築棟の建設が開始されるとともに、積年の課題であった耐震化もいよいよ始まろうとしています。

1 はじめに

本学は学部・学科の新設・改組に際して、大きな施設整備をしてきませんでした。しかし、将来計画（キャンパスマスタープラン）は、2000年に「京都の洛北・北山地域にふさわしい美しいキャンパスづくり」として策定されています。その後、農場の移転、法人化、精華キャンパス整備、大学間連携共同教育推進事業の開始を経て、今、本学の施設整備はダイナミックに発展しつつあります。

一方、2009年には京都府において北山文化環境ゾーン構想として、この地域一帯を文化と環境に包まれた街として整備する計画が発表されています。

本学は幸いなことに、自然災害等による大きな建物被害を受けることなく経過してきたこともあり、多くの建物が老朽化しています。しかし、日本全体が地震の活動期に入った21世紀、特に平成23年3月の東日本大震災を契機に、学舎の安全を確保することは喫緊の課題と言えます。

主に施設整備について全学的に検討するために、平成23年10月に基本構想委員会が設置され、学長のリーダーシップのもとに18回の委員会を経て平成25年3月に府立大学キャンパス整備基本構想（中間まとめ）を策定しました。現在、施設整備委員会において具体的な検討を行っています。

2 工事の進捗状況

1) 北側エリア

①教養教育共同化施設（仮称）（約9,100㎡ 3階建）

本学、京都府立医科大学及び京都工芸繊維大学の教養教育共同化施設は、工事の入札後、地域住民への説明を経て、平成24年10月より工事を開始。平成26年度からの共同授業開始に向けて建設が進んでいます。



②文学部・附属図書館・新総合資料館合築棟（仮称）

（約24,000㎡ 地上4階・地下2階建）

新総合資料館との合築棟は、教養教育共同化施設の工事と併せて8月から着手されています。本学の附属図書館と、文学部教員の研究室等が移転するとともに、新たに国際京都学センターが設置され、平成27年度に供用開始が予定されています。



2) 南側エリア

北側エリアの工事に伴う、バス車庫等移転の必要により、現在、5号館北側に動物実験棟（約214㎡ 2階建）、3号館東側に危険物倉庫（約18㎡ 1階建）を建替え中です。

3 施設整備についての検討

1) 施設整備委員会・専門委員会（学内）

学部長、研究科長、学部選出委員他からなる施設整備委員会の下に、具体的な検討を行うために専門委員会を設置しました。この委員会は、9名の教員に加え、各学部・研究科より計4名の学生が委員として参加しており、6月3日から7月30日までの間に3回開催しています。

委員会では、北側エリアの外構についての意見をとりまとめ、7月初旬に京都府に提出しました。

また、南側エリアの既存施設の耐震診断結果に基づき耐震改修あるいは改築、駐輪場のあり方等について検討を進めています。

2) 京都府立大学キャンパス整備検討委員会の設置

（京都府文化環境部）

平成25年度の京都府アクションプランの一つに府立大学の施設整備が上がりました。老朽化・狭隘化を改善し、安心・安全なキャンパス環境を創出することを目的に、学外有識者を含む検討委員会が7月に設置され、8月27日までに2回の検討委員会が開催されました。

4 おわりに

緑豊かな北山文化環境ゾーンの学術エリアの中心として、文学、公共政策、生命環境科学の教育研究の充実と発展、並びに府民に広く開かれたキャンパスの創造をめざして、教職員、学生が一丸となって取り組んでいきたいと考えています。工事が事故なく順調に進むことを願うと共に、ご理解とご協力をいただきますよう、宜しくお願いします。

トピックス

■地域連携■

本学と行政との新たな連携協力に係る包括協定の締結、スタートした連携事業の取り組みを御紹介します。

また、本年、連携協力に係る包括協定を締結した舞鶴市の多々見市長、精華町の木村町長から「府立大学に期待すること」と題して、メッセージをいただきましたので、合わせて御紹介します。

舞鶴市と連携協力に係る包括協定を締結

舞鶴市との連携・協力の取組を今後一層推進するため、平成25年5月17日に連携協力に係る包括協定を締結しました。

舞鶴市は、京都府北部の文化・経済の拠点の街として、内外との経済交流や文化の振興、観光の振興など街づくりに積極的に取り組んでいます。

一方、京都府立大学は、府民の大学として、地域貢献、地域振興を大学の理念の一つに据えて、教育・研究活動を行っています。また、一般社団法人京都府北部地域・大学連携機構に参画し、府北部の振興の支援の活動をさらに推進していくこととしています。

舞鶴市と府立大学は、これまでから、府立大学の地域貢献型特別研究を活用して、生物の多様性や中山間地域の農地保全などの共同研究を実施するとともに、地域文化セミナーの共催、市民参画推進の活動に協働してきました。

この連携協力包括協定を結ぶことにより、幅広い分野で舞鶴市の課題に対応するとともに、府北部地域の更なる発展に貢献していきたいと考えています。



包括協定で握手する
多々見舞鶴市長（左）と渡辺府立大学学長

包括協定では、今後、次の事項について連携協力をさらに進めていくこととしています。

- (1) 市民参画・協働の推進に関する事項
- (2) 政策推進に関する事項
- (3) まちづくりの推進に関する事項
- (4) 人材の育成に関する事項
- (5) 文化・教育の振興に関する事項 等

府立大学に期待すること

舞鶴市長 多々見 良三（敬称略）

本市と京都府立大学は、各種調査・研究事業の実施をはじめ、講演・セミナーに講師を派遣いただくなど、多くの分野において、連携協力事業を展開してきました。

近年では、市民が政策評価を行う「公開事業評価」、市民と市職員がともに公共政策について学び、政策立案等を行う「政策づくり塾」を府立大学の先生方とともに取り組んでおります。

府立大学におかれましては、幅広い思考力、柔軟な発想力、広い視野を育む教育の中で、京都府北部におけるフィールドワークを今後も重点的に行いたいという強い意向を示していただき、本市が目指す「地域と大学等教育機関との連携による地域づくりの推進」による「活力あるまちづくり」を展開していく上で、今後も、より一層強固なパートナーシップ体制を構築し、ともにまちづくりを推進していきたいと考えております。



■国際交流■

タデュラコ大学との間で大学間学術交流協定を締結

2013（平成25）年3月28日、本学とタデュラコ大学（インドネシア共和国）の大学間学術交流協定を締結しました。

本学で行われた調印式では、生命環境科学研究科の椎名隆教授から協定に至る経緯の紹介と、交流内容の確認があり、その後、渡辺信一郎学長とタデュラコ大学ムハマト・バシリ学長が協定書にそれぞれ署名しました。

この協定により、カカオ研究や生物多様性研究等連携研究テーマにおいて、さらなる交流が期待されます。



学術交流協定の調印式で握手する
タデュラコ大学学長（左）と渡辺府立大学学長

府大発「洛いも～LAKU-IMO～」誕生 ―精華町と産学公連携事業スタート―



精華町との連携協力包括協定（平成25年1月31日締結・府大広報No.171で紹介）に基づく産学公連携事業の第1弾として、府大発の南方系ヤマノイモ「洛いも～LAKU-IMO～」を活用した京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）がスタートしました。

精華町にある生命環境学部附属農場が2011年に「ヤマノイモで緑のカーテン」実験を開始。美味しいグリーンカーテンとして新聞各紙等に取り上げられ大きな反響を呼んだことをさらに発展させるべく、「洛いも」苗の生産を附属農場からJA京都やましろ精華町花き部

会に技術移転し、精華町JA直売所で販売。精華町公所で緑のカーテン植物として栽培・普及するとともに、収穫後のイモをブランド商品として展開するため、加工品・レシピ開発等、産学公の垣根を越えて「洛いも」の地域特産化に向けた連携協力を進めています。

苗の販売開始に先駆け、5月17日（金）には精華町長、東副学長以下関係者が集まり、精華町産苗のお披露目と授与式を開催、取組宣言を行いました。（写真左）

また、附属農場を含む精華キャンパス分属の学生有志が「チームSEIKA」を結成。晩秋まで緑を保ち、ほとんど落葉せず、虫も寄りつきにくい「洛いも」の特性を生かして附属農場玄関前に「緑のアーチ」を製作。せいか祭り（11/17開催予定）でも出展PRすることとしており、精華キャンパス教職員・学生が一丸となって「洛いも」の普及に取り組んでいます。

※ プレスリリースや「洛いも」紹介を農場HPに掲載中
<http://cocktail.kpu.ac.jp/agricul/ufarm/>



府立大学に期待すること

精華町長 木村 要（敬称略）

京都府立大学は、京都府における「知の拠点」として、京都府、ひいては、わが国の発展に大きく貢献されています。

精華町には、平成9年に附属農場を、平成23年に精華キャンパスを設置され、学研都市における産学公連携拠点機能を担われるなど、重要な役割を果たしておられます。

精華町では、以前より、協定自治や健康福祉などの分野で連携を進めてきました。また、連携協力包括協定の締結を機に、精華キャンパスを拠点に、ダイショイモ（洛いも）を活用した特産品開発等の取り組みにも、新たに着手いたしました。

精華町は、今年度から、第5次総合計画の計画期間に突入り、「人を育み未来をひらく学研都市精華町」というまちの将来像を掲げ、学研都市建設の中心を担う自治体としての行政運営を進めています。この新たな節目と時を同じくして、貴大学との連携協定によって、これまで以上に相互の信頼関係が深まり、心強いパートナーとして、学研都市における、地域社会の発展と人材育成に大きく貢献ができるものと確信しています。



学部（研究科）間で学術交流協定を締結

京畿開発研究院（大韓民国）

2013（平成25）年3月21日、公共政策学部の吉岡真佐樹学部長他4名が財団法人京畿開発研究院を訪問し、公共政策学部と同研究院との間で学術交流協定を締結しました。



学術交流協定の調印式で握手する京畿開発研究院の洪淳英院長（左）と吉岡府立大学公共政策学部長

協定締結後にセミナーを開催し、窪田好男准教授が「日本における公共部門の評価の課題」、中根成寿准教授が「社会ケアサービスにおける給付形態と分権化リスク―障害者運動の日韓比較から―」という表題で報告を行いました。

また、今後の学術交流のあり方について確認しました。

Mahidol 大学（タイ王国）

2013（平成25）年7月26日、生命環境科学研究科とタイ王国の国立 Mahidol 大学薬学部との間で学術交流協定を締結しました。

～協定締結を契機として、さらなる研究交流が進むことが期待されます～

■ 公開講座・生涯学習 ■

桜楓講座（春の部）

各学部・研究科の特色を生かした内容で、本学教員が講演する「桜楓講座」(春の部)を、平成25年5月25日(土)、6月8日(土)に開催しました。

Aコース 5月25日(土)
インターネットと日本の魂
講師：生命環境科学研究科教授 吉富 康成

「インターネット」は、アメリカ国防総省のプロジェクトから生まれ、情報革命をもたらした「西洋の科学技術」であり、一方、「武士道」は、神道、禅宗、儒教をその拠り所とする「東洋思想」であるところから話しが始まり、インターネットが生まれた経緯、光と影、そして、「国のかたち」や「人間」をも変えてしまう「危うさ」について講演がありました。アテネオリンピックの長嶋ジャパン、第1回WBCの王ジャパン、なぜ、サムライジャパンなのか。学校ネットパトロールシステム、認知症・高齢者の音楽療法のための楽曲推薦システム、うつ病遠隔診断支援システムの研究などにも触れながら、現代日本人の精神の拠り所について話しがありました。



Bコース 6月8日(土)
社会発展と家族の進化
講師：公共政策学部教授 小沢 修司

社会の変化・発展につれて家族も変化していきます。そんなことは言われなくても当たり前…とはなかなか思えないのが実際のところではないでしょうか？なぜなら、日常生活の中での変化って、気が付きにくいものなのです。家族って空気のような存在で、有って当たり前、いや人によっては無くて当たり前の場合だってあります。講演では、人によってさまざまな当たり前が渦巻く家族の変化する姿を、戦後の日本経済の発展と重ね合わせながら考えるとともに、これからの家族の姿も考えてみました。



今回より新たな取組みとして、各講座の開始前に本学学生の課外(サークル)活動の発表をさせていただきました。

5月25日は雅楽会、6月8日はジャズ研究会の演奏を見ていただき、参加者の方々から「学生の一生懸命さが伝わってきた」、「初々しくて良かった」、「楽しかった」、「今後も続けて欲しい」など、たくさんの暖かいお言葉をいただきました。

高校生のための 木を見て森をみるセミナー

7月21日開催 大枝演習林(西京区)

夏休みを迎えた高校生らを対象に、大学の森で樹木の生態や森の仕組みなどについてわかりやすく解説する演習林野外セミナーを開催しました。

本学の演習林の中で最も古い歴史を持つ大枝演習林は、都市に近接しながらも様々な森の姿を見せる里山です。受講生は京都だけでなく四国や関東からの15名で、4名の森林科学科教員が講師役を務めました。



ヌマスギの気根がニョキ・どきっ

里山のマツや広葉樹の樹木観察を皮切りに、100年も経つヒノキ林で辛うじて生き残った細い木の年輪をルーペで観察する体験を、カシノナガキクイムシの攻撃にあって木くずを出しているコナラの観察を、外国産樹種の見本林では、生きた化石とも言われるメタセコイア、地面から気根を出すヌマスギなど、珍しい木を見て森を楽しみました。そよ風が吹く

峠で昼食の後、GPSを使って自分の歩いた道を記録することや、葉っぱや幹で知る樹木の同定法、20mを超えるヒノキの樹高測定、「おみとおし」という簡易な測定器で木を測り森林の蓄積量を知るなど大学の実習そのものでしたが、講師の分かり易い話で納得したのか受講生はアカデミックな雰囲気味わいました。



木をしっかり観察すると楽しいよ

このように、木をしっかり観察することで森の姿やそこに暮らす動植物の生き様も垣間見ることができるといえることを発見した一日でした。

南丹市にある大野演習林

秋には、左京区にある久多演習林で野外セミナーを開催します。多くの御参加をお待ちしています。

受賞情報

Letters

文学研究科 三好 英樹 さん

「智山勸学会学会奨励賞」、「護法会賞」受賞

史学専攻博士後期課程3回生の三好英樹さんが、論文発表により、「智山勸学会学会奨励賞」及び「護法会賞」を受賞しました。

受賞論文 「中世後期根来寺内における修験道」「織田信長の高野山攻めにおける調伏祈祷と高野山客僧」

Public Policy

公共政策学部 多田 実里 さん

みずほ学術振興財団懸賞論文
「法律の部・学生グループ3等」受賞

公共政策学科4回生の多田実里さんが、第54回みずほ学術振興財団懸賞論文で「法律の部・学生グループ3等」を受賞しました。

受賞論文テーマ 「不動産賃貸借契約における更新料条項を有効とした最高裁判決（平成23年7月15日）の問題点の分析」

公共政策学部 杉岡ゼミ3回生（受賞時）
全国大学まちづくり政策フォーラム
「優秀賞」受賞

平成25年3月、公共政策学部の杉岡秀紀講師ゼミ3回生（受賞時）が、「第7回全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」で、「優秀賞」を受賞しました。

政策提言テーマ 全国ボウズプロジェクト in 京田辺

Life and Environmental Sciences

生命環境科学研究科 東 恵理子 さん

日本薬学会「優秀発表賞」受賞

応用生命科学専攻（機能分子合成化学研究室）博士後期課程3回生の東恵理子さんが、日本薬学会第133年会において、「優秀発表賞」を受賞しました。

受賞演題 新規ジベンゾキサンテン色素の合成と構造—物性相関

生命環境科学研究科 中西 研太郎 さん

日本薬学会
「報道機関向け講演ハイライト」選出

応用生命科学専攻（機能分子合成化学研究室）博士前期課程2回生の中西研太郎さんの発表が、日本薬学会第133年会において、「報道機関向け講演ハイライト」に選出されました。

演題 「扇状三次元π系オリゴナフトフラン」の合成と機能

生命環境科学研究科 佐生 愛 さん

日本農芸化学会「トピックス賞」受賞

応用生命科学専攻（遺伝子工学研究室）博士後期課程1回生の佐生愛さんが、日本農芸化学会2013年度大会において、「トピックス賞」を受賞しました。

受賞演題 経口ワクチン用キャリアーを目指したイネ種子PB-1の特定部位への外来タンパク質局在化と消化酵素耐性に関する研究

生命環境科学研究科 東田 昌子 さん

日本建築学会「優秀修士論文賞」受賞

環境科学専攻（建築計画学研究室）の東田昌子さん（平成25年3月博士前期課程修了）が、日本建築学会「優秀修士論文賞」を受賞しました。

受賞論文 「日常生活圏域からみた過疎地域の包括的地域医療サービスの連携に関する研究—京都府を事例として—」

生命環境科学研究科 井上 玄規 さん

空気調和・衛生工学会
「優秀講演奨励賞」受賞

環境科学専攻（建築設備学研究室）の井上玄規さん（平成25年3月博士前期課程修了）が、平成24年度空気調和・衛生工学会大会において、「優秀講演奨励賞」を受賞しました。

受賞論文 民生家庭部門のエネルギー消費量の将来予測
その2 戸建住宅と集合住宅のエネルギー消費量の推移

生命環境科学研究科 前田 実可子 さん

日本建築学会近畿支部
研究発表会「優秀発表賞」受賞

環境科学専攻（建築設備学研究室）博士前期課程2回生の前田実可子さんが、「2013年度日本建築学会近畿支部研究発表会優秀発表賞」を受賞しました。

受賞演題 「空気循環式全館空調システム住宅の太陽熱利用に関する研究」

生命環境科学研究科 山本 大輔 さん

空気調和・衛生工学会近畿支部
学術研究発表会「奨励賞」受賞

環境科学専攻博士前期課程1回生の山本大輔さん（受賞論文発表時：生命環境学部環境デザイン学科（建築設備学研究室）4回生）が、平成24年度（第42回）空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会において、「奨励賞」を受賞しました。

受賞論文 「住宅外被のリノベーションによる省エネルギー性能の向上に関する研究」

生命環境科学研究科 谷 直樹 さん

日本建築学会「優秀卒業論文賞」受賞

環境科学専攻（建築設備学研究室）博士前期課程1回生の谷直樹さん（平成25年3月生命環境学部卒業）が、日本建築学会「優秀卒業論文賞」を受賞しました。

受賞論文 「飽水コンクリートの放湿特性に関する基礎研究」

生命環境科学研究科 國永 知裕 さん

日本森林学会大会「学生ポスター賞」受賞

環境科学専攻（森林植生学研究室）博士後期課程3回生の國永知裕さんが、第124回日本森林学会大会において、「学生ポスター賞」を受賞しました。

受賞題目 冷温帯スギ・落葉広葉樹混交林において母樹からの距離がブナの更新に与える影響の解明

生命環境科学研究科 神林 徹 さん

日本木材学会大会「優秀ポスター賞」受賞

環境科学専攻（森林資源循環学研究室）博士前期課程2回生の神林徹さんが、第63回日本木材学会大会において、「優秀ポスター賞」を受賞しました。

受賞演題 「顕微ラマン分光法を用いたイオン液体処理木材の化学成分分析」

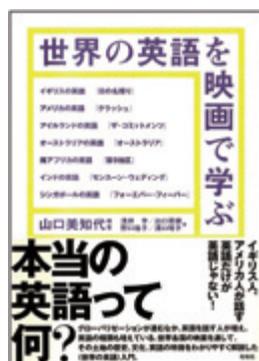
各学部・研究科の取り組み

文学部

「なまってるほう？」

欧米言語文化学科 山口 美知代 准教授

朝の連続テレビ小説「あまちゃん」が好きで、毎日見ていました。主人公のあきは、東京生まれですが高校2年生のときに母親と北三陸に引っ越してきて、土地の方言を話すようになります。驚いたときは「じょ!?', 一人称は「おら」、語尾は「だべ」というように。おもしろいのはその後東京に帰ってからも、あきの話し方が東京の言葉に戻らないことです。あきが親友のゆいとするアイドルユニット潮騒のメモリーズでは、ゆいが「かわいいほう」、あきが「なまってるほう」と呼ばれるくらいで、あきのキャラクター設定にとって「なまり」は重要なのです。



さて、ドラマ「あまちゃん」で「なまり」という語が何度も普通に使われるのを聞いて、私はこの春に出版した本のことを考えていました。『世界の英語を映画で学ぶ』(松柏社)という、欧米

言語文化学科の教員や学外研究者との共著書です。ここでは「なまり」という言葉を敢えて一度も使いませんでした。

これは、イギリス英語、アメリカ英語、アイルランド英語、オーストラリア英語など、母語としての英語や、南アフリカ英語、シンガポール英語、インド英語など、母語ではない公用語としての英語の特徴を、映画を使ってわかりやすく説明した本です。「なまり」という言葉を使わなかったのは、ある国・地域の英語を「なまり」と言ってしまうと、それは「標準ではない、違って、間違っている」という意味を伝えてしまうのではないかと考えたからです。

でも「あまちゃん」を見ながら、こんなに「なまり」がブームになるんだら、本のなかでも「なまり」という語を使ってもよかったのかも(少し本気で)思ったりしました。なまっていることがあきの個性であるように、世界のさまざまな地域で話される英語は、それを話すひとの個性であり、その地域の歴史、文化とも密接につながっています。そういうことを「なまり」という言葉を使わずに書いた本です。

社会的養護現代化と当事者エンパワーメント

公共政策学部

社会的養護現代化と当事者エンパワーメント

福祉社会学科 津崎 哲雄 教授

筆者の研究対象は家庭生活を奪われた子ども (children deprived of normal family life) に提供される社会サービスの在り方である。戦後から民間法人に丸投げし、国家責任をすりぬけてきたこの国は、子らが求める暮らしとは世辞にも言えぬ代物を法人施設に提供させ、それを社会的養護と呼ばせ今日に至っている。外圧を避けられぬとみた国は、この分野の20世紀前半化(大規模施設閉鎖・小規模/グループホーム化・家庭的養護推進)をここ数年企ててはいるが、笛吹けど自治体は踊りはしない。

こうした社会サービスを、米国は世紀初頭、欧州諸国は第二次大戦後に、家庭的養護策として20世紀化している。その後現代化(21世紀化)を試みた英国は、その要件を「専門職児童ソーシャルワーク機関遍在」「良質な家族委託(ケア資源)提供体制整備」「当事者エンパワーメント機制定着普及」とし、第三要件の実質性に特に励んだ。すべて前近代の日本では、80-90年代の当事者エンパワーメント実践(全国養護施設高校生交流会=日本型当事者意見表明活動)が、その明確な実効性と影響力の故に、既得権益喪失を危惧した全国施設経営者団体により解体された。社会的養護史の最大汚点として検証されるであろうが、日本が当事者エンパワーメントとは別世界にあることの証であろう。

児童相談所の組織特性/ソーシャルワーク問題や「孤児院」と見紛う施設資源を鑑みると、これらの近代化にはまだ四半世紀は要するであろうが、各地に散見される社会的養護当事者(居場所確保+)エンパワーメント活動からは、ささやかな光が発せられ始めている。さらに、家庭内/施設内児童虐待への啓発が進み、虐待・ネグレクトを子どもへの人権侵害とみなす市民意識が芽生えつつあり、アナクロ資源への眼差しは厳しくなり、国の施策と相まって、社会的養護資源20世紀化と当事者エンパワーメント活動は遅々としてはいても確実に進むだろう。



残るは児童相談所問題であり、児相の20世紀化(官僚や施設のニードではなく、子らのニードを充足する専門機関化)が果たされぬ限り、子らが長じて税濫用者でなく納税者になる可能性は百年河清をまつのたくいであり続けよう。残り僅かな筆者の研究生生活は、公が認識できない(できてもしない)この問題を、社会人類学的視座から提起し直すことに費やせばと思っている。

生命環境科学研究科

木質バイオマス（木材）が切り拓く循環型社会 ～イオン液体を用いた新規木材利用技術の開発～

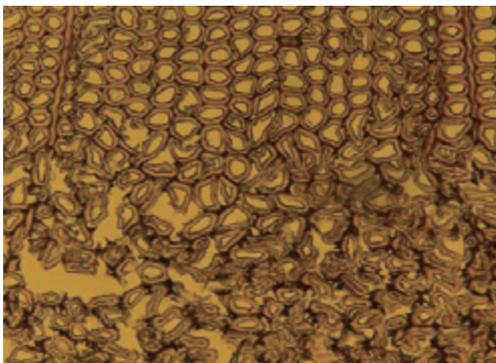
環境科学専攻 森林資源循環学研究室 宮藤 久士 准教授

木質バイオマス（木材）は、高分子であるセルロース、ヘミセルロース、リグニンの3つの化学成分から構成されています。当研究室では、この成分を様々な化学製品に変換し、効果的に利用していくための技術開発を行っています。

我が国は国土の約3分の2を森林が占めており、木材資源は豊富に存在しております。また、木材は光合成によって生産されることから、カーボンニュートラルかつ再生産可能といった特徴を有し、低環境負荷型の資源と言えます。さらに、他の光合成産物であるデンプンや糖質とは異なり、非食用資源であるため食糧問題と競合しないことから、利用促進が強く望まれています。

これまでも木材を利用するための様々な方法が提案されていますが、当研究室ではイオン液体処理技術をキーテクノロジーとする、新規な利用方法について研究を行っています。イオン液体は、常温付近（100℃程度以下）に融点を持つ塩のことであり、溶解力に優れている、揮発性が極めて低い、難燃性、イオン性であるが低粘性などのユニークな特徴を持っています。

このイオン液体中で木材を加熱すると、セルロース、ヘミセルロース、リグニンがイオン液体に溶け出し、木材が液化していくことが分かりました。その過程では、木材の細胞は一つ一つバラバラになりながら反応が進んでいくことも明らかになっております。さらに、溶け出したセルロースは、セロオリゴ糖、セロピオース、グルコース、セロピオサン、5-ヒドロキシメチルフルフラール、レボグルコサンなどの様々な有用な化学物質へと変換されていくことも分かりました。ヘミセルロースからはキシロース、マンノース、ガラクトース、アラビノースなどの糖類が生成することも明らか



木材液化の様子

かにしました。イオン液体は、木材高分子成分を液化させることと、液化した成分をさらに分解して、様々な低分子の化学物質へと変換するという、2つの異なる反応を引き起こす反応場であると言えます。ここで得られている化学物質は、医薬品、プラスチック、バイオ燃料などの原料であり、現在化石資源から製造されている様々な化成品を作ることができます。

これまで研究が行われてきた技術では、触媒を必要としたり、高温高圧の処理が必要でありましたが、イオン液体処理では比較的低温で、かつ無触媒で木材から上記のような化学物質を得ることが可能であり、セルロースや木質バイオマスの新規な化学変換技術として期待できます。

さらに、木材の利用促進に向けたイオン液体処理技術として、木材の難燃化薬剤としての利用に関する研究を行っています。木材を建築材料等に利用する場合には、「燃える」という性質は欠点とされ、難燃化処理を必要とする場合があります。イオン液体処理木材と無処理木材との燃焼比較実験の結果、イオン液体処理木材では火に触れた部分が焦げたのみで、炎は立たず延焼することもなく、イオン液体が木材の難燃薬剤として効果的であることが分かりました。「燃える」という性質のために木材の利用が困難であった場所においても利用を可能とし、さらに住宅や各種建築物の防災・減災につながる新規な木材処理技術として、さらなる研究開発を進めております。



無処理

イオン液体処理

燃焼比較の様子

このような技術開発が実用化すれば、木材の利用が促され、これまで石油などの化石資源に頼ってきた社会を脱却し、木材資源を中心とした低炭素社会、資源循環型社会の構築が可能となると考えております。

■ニューフェイス■

平成 25 年 4 月着任の教員の紹介

文学部 欧米言語文化学科

講師 大谷 直輝 (おおたに なおき)

<主な研究領域>

語学 (認知言語学・コーパス言語学・談話機能言語学)

ヒトが使う言葉には、ヒトがどのように世界と関わり、どのように認識したかが反映されています。そのため、言葉の構造や機能の背後に存在する一般性には、ヒトの心という捉えどころのないものを理解する上で役に立つヒントがたくさん隠されています。私は、主に英語の前置詞や句動詞の文法・意味・談話レベルに見られる体系性を明らかにすることで、言語を生み出す基盤となる人間の認知的な能力について、少しでも理解を深めていきたいと考えています。



文学部 歴史学科

准教授 横内 裕人 (よこうち ひろと)

<主な研究領域>

日本中世史、主に平安・鎌倉時代の宗教史

日本の中世史は、政治・経済・外交・文化といった、どの分野においても仏教が深く関わって推移してきました。日本独自とされる宗教の枠組みの成り立ちと構造について研究を進めています。

最近の関心は、仏教を通じた宋・高麗との外交関係で、モノの輸入や僧侶の交流の実態を探っています。

多種多様な文化財(モノ・場)が数多く残る、この京都という場所にこだわって新しい日本宗教史を組み立てたいと考えています。



イベント情報

桜楓講座 (秋の部)

最近のトピックを交えながら、本学教員がそれぞれの専門分野について分かりやすく解説します。

Cコース 10月19日(土) 10:00~12:00 講師: 生命環境科学研究科准教授 宮藤 久士
「未来を切り拓く木質バイオマス」

Dコース 11月2日(土) 10:00~12:00 講師: 文学部准教授 林 香奈
「黄遵憲を通してみる中国の詩と伝統」

場 所 両コースともに、京都府立大学 合同講義室棟 第3講義室

一府大広報の新しいタイトル「ふたはの桂」について一

2012年12月7日から2013年1月31日までの間、当広報誌のタイトルを学内公募いたしました。

広報誌編集部会で応募作品について協議し、文学部日本・中国文学科の保田大介さん(応募時4回生)の応募作品を元に「ふたはの桂」とすることにいたしました。これは、本学のロゴに描かれている二枚の桂の葉を表し、二枚のハート型の葉が寄りそうような温かい府立大学の雰囲気がいっまでも続くように、との願いが込められているものです。御応募ありがとうございました。

なお、「桂の葉」は、本学の前身である旧制専門学校が右京区桂に所在した縁で、学章のデザインに用いられるようになり、現在の本学のロゴにも引き継がれているものです。

タイトル命名にあたり、渡辺信一郎学長に表紙の「ふたはの桂」を揮毫いただきました。

また、表紙の写真は、写真部の梅村崇さん(農学生命科学科3回生)に提供いただきました。みなさま、ご協力ありがとうございました。

広報委員会広報誌編集部会



京都府大広報 ふたはの桂 No.172 京都府立大学広報委員会 2013.10.1 発行
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 TEL.075-703-5904 FAX.075-703-5149
Email kikaku@kpu.ac.jp